

2018. 1. 11 (木)

## 「働く」とは何か

難波功士

怠け者よ、蟻のところに行って見よ。  
その道を見て、知恵を得よ。  
蟻には首領もなく、指揮官も支配者もないが  
夏の間にパンを備え、刈り入れ時に食糧を集める。

(箴言 6章6-8節)

学期の最後は、学部長がやるというのが慣例なので、今日は担当いたします。春学期の最後にしゃべったことは、秋学期も出てねという話でした。

この学年末の話だと、やはり来年度も出てほしいなということをお話すべきだと思うのですが、ただ出てくれと言うだけではどうしようもないので、どうすれば、みんな出てくれるのかなと考えました。私も、ずっとチャペルに出ていて面白い話が聞けたときに、また出ようという気になりましたから、こうやって機会が与えられたときに、できるだけ聞いて面白い話、ためになる話をすべきだろうなと思って、自分に何ができるのかなと考えてみました。

秋学期のチャペルは三つのテーマで、皆さんお話していて、それぞれ面白かったと思うのですが、この中で、自分がしゃべりたい、しゃべれるものはどれだろうと考えたのです。私は非常にネガティブな人間なので、「幸せ」というテーマよりも不幸というテ

マを与えられたほうがしゃべりやすいし、「希望」というよりは絶望のほうが語りやすかったりするのですけれども、「働く」というテーマだと、割と素直にしゃべれそうな気がしましたし、話を聞いていても、同僚の先生方が、こんなことを考えながら働いていらっしゃるんだなといういろいろわかって、「働くとは何か」のシリーズが一番楽しかったと思うので、それをお話したいと思います。

聞く皆さんも大学生でしょうから、これから卒業して、どういう職業人としての人生を歩もうかと考えている頃だと思います。私がこういうふうに通じてきた、働いて、こういうことだと思っているという話をして、少しでも参考になってくれたらうれしいな、ぐらいの感じで、何かの参考になればいいかなと思っています。

私は、大学を出てから三十数年間ずっと働いてきていますから、そのときどきに、こういうことを考えて、その職業を選んで、どんなことを考えて働いていたかという話をまず

します。そんな興味ないと思うかもしれませんが、おつきあください。

### 私が「働く」に至るまで

生い立ちみたいなのところから始めてしまうのですが、私は、1961年に、大阪市で生まれています。サラリーマンの父親と、専業主婦の母親、2つ上の姉、ごく標準的な家庭で生まれました。その後、育ったのは、親が大阪の郊外に建売住宅を買って、こんなところで（スライドを提示）、18歳まで過ごしています。小中高と、そんな楽しい話もなかったのが全部飛ばそうかと思うのですけれども、でも、自分にとって大きな出来事としてあったのは、小学校6年のときに、いきなり父親が死んでしまって、ああ、というのがあったんです。しかし、母親は非常にしっかりした人だったので、すぐ働きに出てくれて、私と姉に対して、「家のローンは大体終わっているし、そんなぜいたくをしなれば、ちゃんと暮らしていけるし、現役で国公立がマストだけれども、大学ぐらい行かせてあげるから」と言ってくれたので、ありがたいなと思って、そのまま地元の公立の小学校、中学校、高校と進んでいきました。

高校のときに、大学どこ行くかとか、その先、どういう仕事をしようかと考え始めたときに、1つだけ憧れた仕事があったのです。自分の通っていた高校に、図書館の先生がいて、司書教諭という仕事はいいなと思いました。なぜいいと思ったかという、本を読むのが好きというのが第一なのですが、私は、その頃から、チームで仕事をするとか、人と協力してとか、上下関係の中でうまく振る舞うとか、そういうことはもうできない人間だ

なと思っていたのです。今の言葉でいうとコミュニケーション能力が非常に低いという自覚があったので、1人で図書館に来て何かやって、生徒とも最低限しかかかわらない、ああいう先生のあり方はいいなと思いました。

そういうことになりたいと思って調べてみると、国語か社会の教職の資格を取って、司書の資格を取ったらなれそうだなということが分かったので、もう大学生になっていた姉に相談して、「こんなことを考えているんだけど、教育学部とか教育大に行かなあかんかな」と聞いたんです。姉は非常に的確なアドバイスをくれました。「あんた、別に本気で先生になりたい訳でも、教育に情熱がある訳でもないやろ。そんな人間が教育大に行ったら、しんどいだけだから、あんたは好きなところに行ったらいいと思う。大きな大学だったら教職も司書も取れると思うから、そこで好きなことやっというほうがあえんちゃうか。それから、そういった資格を取ろうと思ったら、余計に単位を取らなければいけないから、単位の取得が楽な大学に行きなさい」と言ってくれて、それは非常に有意義なアドバイスだったと今でも感謝しています。

当時、日本史が一番教科としては好きだったので、文学部に行ってみようかな、日本史を専攻しようかなと、そのまま高校の社会科の先生の資格を取って、司書資格も取ってみたいなのを考えて、大学に入りました。で、実際に日本史を専攻して、近世史、江戸時代が専門だったのですけれども、そういう学生の生活がどんなものかという、こんな感じですよ（スライドを提示）。

モノクロの写真が多いのですが、1980年代に入っているの、基本的にはカラープリントの時代でした。デジタルはまだなかった

ですから、カラーフィルムが普通なのですけれども、私のカメラの中にはモノクロのフィルムばかりが入っていました。それは、何も格好をつけている訳ではなくて、日本史専攻の学生は、古文書を撮るためにカメラを使うのです。和紙に筆と墨で書いた文字を解読していたので、カラーよりもモノクロのフィルムを使いました。京都の大学に行っていましたから、京都の他の大学の、同じ時代を専攻している学生や、大学院生たちと調査旅行に行ったり、合宿みたいのをたくさんやっていたのですけれども、三脚に、下に向けてカメラを付けて、その下に広げた古文書を撮ったり、古文書を整理したり、読んだり、そんなことばかりやっていました。

それが別に全然嫌じゃなかったし、楽しかったし、そうやって歴史を掘り起こすことが好きだったのですけれども、本格的に研究者になろうとすると、大学院まで行って、いつ定職に就けるか分からないようなことになってしまうから、やはりそれはちょっとしんどいなと思ったので、最初考えたとおり、高校の先生を、まず目指そうと思いました。

だから、大学4年のとき、普通に教育実習とか行っているのです（スライドを提示）。でも、昔だから2週間行けばいいという気楽な時代だったし、出身校に行ったのですけれども、6月に文化祭があるような高校だったので、その前に2週間行って、授業も何回かやりましたけれども、基本的には生徒と遊んで帰る。そんなことですから、生徒に、「文化祭の出し物に協力して」と言われて、出て行って何か適当にやったりだとか、野球の強い高校ではなかったのですけれども、たまたま甲子園に出れた年だったので、一緒に応援に行ったりして、そういうのはも

のすごく楽しかったのですけれども、先生は無理だなと、教育実習をして力強く思いました。司書教諭も採用はあまりなさそうです。では、一般企業を目指してみようかと、もう4年の夏から秋にかけてはバタバタと、そんなことを考えていました。

三十数年前の話ですから、まだ就職協定が割と守られていた頃で、4年生の10月1日から説明会が始まって、11月1日から内定を出してい、そういうルールが、もちろんフライングしている人や会社もたくさんあったのですけれども、割と守られていましたし、スライドに「コンテンツ作る系」とか書いていますけれども、文学部に行ってマスコミ就職ぐらいが一番、他の学生とハンデを持たずに闘えるかなと思ったので、大阪の民放局、広告代理店、出版社、そういうところから、ちょっとずつ受けていったのです。

今だったら、メディアとかマスコミが、最初に採用活動に動きますけれども、その当時は、スケジュールの後ろのほうにドンと構えていたので、4年の夏から秋にかけて、「そういうところへ行こか」と思い始めても何とか間に合う、そんな時代だったので、バタバタとやっていて、なぜか広告代理店が拾ってくれたので、そこで働くことにしました。関西にずっといたし、東京にちょっと行ってみるのもいいかなと思って、働き始めました。

### 最初の「働く」——広告代理店に勤務していた頃

これは当時の広告代理店の組織図みたいなものなのですが（スライドを提示）、1980年代で、インターネットも、モバイルも全然ない時代で、マスメディア中心だし、テレビ

はまだまだ大きな影響力を持っていた時代の話なのですけれども、今と、そんなに仕事の仕組みは変わっていないように思います。何がこの広告代理店の仕事に近いかなと考えたら、一番近いのは、多分、町の不動産屋さんで、アパートやマンションの賃貸物件の仲介斡旋している人たちかなと思っていました。

どうということかという、テレビ局でしたらCMの枠があったり、新聞社だったら新聞の広告欄とか、貸し出そうとするスペースがあるのです。それに対して、広告を出したい側は、そこを借りたい。貸したい側と借りたい側の間に入り込んで、うまく仲介して、仕事が成り立ったら手数料が落ちてくる、そういうビジネスモデルになっていました。ですから、90人ぐらい同期がいて、男女雇用機会均等法以前の話ですから、基本全部男ですけれども、3分の2ぐらいは営業とか媒体という部署に配属されるんです。営業に配属されたら、トヨタ担当とか、花王担当になって、その会社の宣伝部に出入りする。媒体マンになったら、テレビ朝日系列担当とか、日経新聞担当とかになって、媒体社の広告局とか、営業局とかと言われるところに顔を出します。そういう連絡・調整役の仕事が、広告代理店の業務の中心になります。

あとの3分の1は、どういう配属をされるかという、その他もろもろなのですが、SPというのはセールスプロモーションで、事業はイベント関連ですけれども、私が配属されたのは制作というセクションになりますから、実際に広告を作る仕事が振られてきました。コピーライターという肩書ももらって、キャッチフレーズや商品のネーミングを考えたりするのが仕事でした。コツコツ、いろいろなことを考えているのは嫌いではな

かったし、東京で働くのも楽しい経験だと思ったのですが、やっているうちに、広告業界は、自分には全然向かないということが分かり始めました。

それはなぜかという、先ほども言ったように、私はチームワークとか、チームプレーがなかなかできなくて、自分1人でコツコツ自分のやりたいことをやって、「はい、これ作りました」というのが好きなのに、CMを1本作ろうと思ったら、本当にたくさんの人たちがかわり合って、それを仕切ったり、いろいろな人とのやり取りの中からでき上がっていく共同作業がものすごく大きな部分を占めるので、「あ、これはちょっと自分違うな」と思ったのと、バブルに向かう東京でしたから、働き過ぎ、忙しかったのもあるし、忙しくても仕事が楽しかったらよかったですけれども、楽しい仕事もたくさんありましたが、メインのクライアントと、メインのクライアントと一緒にやっている直属の上司が好きじゃなかったという理由があって、ここから脱出したいなと思い始めました。

22から7年働いて、29の年に、大学院に逃げ込んでやろうと思ったのです。その7年の間、残業代たくさん付けていましたから、2年間ぐらいだったら働かなくても食べていけると思ったので、社会学、しかもマスコミ研究中心にしたような大学院のコースがあったので、そこに入って、大学院生を29から31の年まで、2年間やりました。

大学院に行ってみて、やはり俺、キャッチフレーズを書くよりも論文を書いているほうが性に合っているなと分かったのですけれども、でも、それではすぐには食っていけないのも分かりましたから、31歳で、一遍会社に戻っています。会社に戻って、またもう一

遍、同じように、制作の部署に戻されました。その頃の写真があったので見てもらいたいのですが、こんな感じのところで働いていました（スライドを提示）。私の年齢でいうと32とか33で、年代でいうと1993～94年頃だと思います。皆さんが生まれる前かもしれませんけれども、こんなふうに働いていました。

得意先に行く用事か何かがあったと思うので、ネクタイをちゃんと締めていますけれども、割と気楽な職場で、好きなアイドルの写真を机に張っていても怒られないし、そろそろPCが各デスクに置かれ始め、インターネットの普及も始まっていた頃ですけれども、皆さんの持っているスマホの何百分の1ぐらいの性能しかないPCです。マスメディア中心のメディアの仕組みも変わり始めていて、広告代理店がそんなにポロイ商売ではなくなり始めていた頃だったし、パブルがはじけた後だったので、そんなに仕事は楽しくなく、鬱々と働いていました。

こんな怪しげなおじさんたちと働いていたので、人間関係は全部面白かったし、楽しかったのですけれども、やはり広告の仕事が自分には性に合わないなと思っていました。修士課程をやって、修士論文を書いていましたから、その修士論文の幾つかのパートを学会誌に投稿して、発表している論文が何本かあったりしたので、研究者としての業績はありました。でも、会社員をやっていました。そんなとき、知り合いが、「関学の社会学部に1人欠員が出て、教員募集あるらしいし、おまえ、一応、条件は満たしているから応募したらどうや」と言ってくれて、うまい具合に転職できたのが1996年です。

## 第2の「働く」——関学に転職してみた

やはり1人で何かをやりたい人間にとっては会社員よりも大学教員のほうがずっとやりやすい環境だったなと思い、転職はよかったなと感じています。

就職とか転職に関して、ものすごく運がよかった人間なので、ほとんどの運をそこで使い果たしている気もしますけれども、職業に関しては恵まれた人生を歩んできました。大学を出てから12年間会社員をやって、関学に転職してから二十数年間、大学教員をやった今日に至ります。

その全体を俯瞰できるような表とか図、グラフがないかなと思って、1つもってきました（スライドを提示）。あと、年収の折れ線グラフもあるのですが、それはこんな場に出すのは余りにもふさわしくないなので、別のグラフを作ったのですが、これは何かというと、最初会社員になった1984年から始まって2017年までの話なのですけれども、その年に自分は何冊、本を読んだかというグラフなのです。大学生の頃から読んだ本の書名と著者名を控えるくせがずっとあって、年の最後には、今年何冊読んだかなとカウントするくせがあったので、すぐグラフは作れるのですが、働き始めて、忙しいとか言いながら、本を読むのは好きな子で、ずっと本を読んでいて、だんだん社会学の本も増えてきました。20代の後半、大学時代は何の興味がなかった社会学は面白いなと思い始めていて、最初の山が来ます。最初の山は、あれはまるまる大学院生をやっていた1年間です。英語の本もたくさん読んだし、論文の類もたくさん読んでいたけれども、他にやることもないから修士論文を書こうと思って、一生懸

命勉強していたのだなと思います。集中的にいろいろな本を読んでよかった年だったと思いますけれども、会社に戻ってしまうと、だんだん忙しくなって読めなくなる。でも、転職したら、また読めるようになりました。

この切れ込みは何かというと、大学教員になって最初の本が出せた年です。アウトプット、出す年だったので、ちょっとインプットが減ったという感じなのです。自分は、大学院で何をやってたかということ、大学時代に日本史、歴史をやっていて、広告代理店で働きましたから、日本の広告史、民間テレビ放送始まって以降の広告の歴史みたいなことをやろうとしていて、広告の制作者の歴史、クリエイターの歴史を調べていると、大正時代に、そういう人たちがどっと出てくるのですが、第二次世界大戦中、商品広告の仕事は全部なくなってしまったときに、その人たちが何をしていたかということ、プロパガンダ仕事、戦争を頑張りましょうという壁新聞だとか、ポスターを作って生き延びて、戦後また広告業界に復帰して、戦後、大きな仕事をしに行った人たちの話を書きました。1冊本を出せてよかったという感じなので、しばらく何をしていたのかよく分からなかった時期があるのですけれども、関学で働き始めて6年たったときに、1年間、スコットランドに行かせてもらったのが、このリスの写真です(スライドを提示)。

スコットランドの田舎町で、本当にのどかで、リスがこういうふうには朝来るような町で、1年間何もすることもなく過ごしていました。でも、本が読んでいないのは、英語の本しか周囲になかったから、どうしてもスピードが落ちたのですけれども、その1年間に、帰ってから、何をやろうかなと考える

時間をもらえて、広告の歴史はずっとやり続けるのだろうけれども、戦後若者文化史とか、戦後メディア文化史みたいなことで、ちょっと仕事をしたいなと思って帰ってきて本を書きました。その後は、本を読むのがどんどん雑になっていくし、英語の本も読まなくなっていくのですが、ポツポツ本を書きながら、この1月末にはこんな本が出せることになりました(『広告で社会学』の書影を提示)。

非常に紆余曲折した人生のように見えますけれども、大学で日本史をやって、広告代理店で働いたことで広告史の本も出せたし、広告代理店から社会学部に転職したことで広告をネタに社会学の本を書けたり、何かどこかで、無駄なくというか、何が生きてくるかわからないし、そのとき、つまらないな、嫌だなと思っていた仕事も、その後の仕事につながったりしたのかなというようなことを思います。

結局、「働く」とは何か。

まとめです。こういう職業人生なので、余り夢のある話はできませんけれども、大学を出て、いつまでも親の世話になっているわけにいかないから、何とか自分で、自分の食い扶持くらいは何とかしようということで働き始めて、もちろん、自分のやった仕事がちょっとでも社会とか、人のためになればいいとは思いつつも、でも、基本的には与えられた仕事をやっていました。でも、どうせ働かなきゃいけないのだったら、できるだけ楽しめたほうがいいし、割がいいほうがいいし、ちょっとは誰かの役に立てればいいなということはあると考えながら働いてきました。

皆さんも社会に出ていくとき、最初に就いた仕事に、どこかで不満な点もあると思いますけれども、いきなり、100%、自分の思いどおりに好きな仕事ができるというわけではないので、そういう人もときどきいるかもしれませんけれども、多くの方はだんだんちょっとずつ実績を積んで、発言力を増やしていった、自分のやりたいようにというか、自分のやれる部分を増やしていった、楽しくしていくしかしようがないんじゃないかなと私は思い、今日に至ります。現在も、全ての仕事を楽しいとは思えないのですけれども、でも、ちょっとずつ楽しくなっているなどいうことを、この年でもまだ思っているのは幸せなことだなとは感じています。

でも、余り、夢のない話をしている、働く意欲とか、原動力、理由づけみたいのが湧かないということになるかもしれませんけれども、私も、そんなにそれははっきりしなかったのですが、その辺の迷いが全部吹っ切れたのが43になってからです。43になったときに何があったかという、43で、父親になっているのです。私の父親は41で死んでいるのですけれども、そのときに家のローンが全部終わっていて、偉いと思うのですが、私は43で初めて父親になって、そこから家のローンが始まることになります。1人だけだったらよかったのですけれども、娘と息子、2人一遍に生まれています。生後2ヶ月ぐらいの写真だと思うのですが、娘、かわいいですね（スライドを提示）。彼女の人生のピークがここで来てしまったような気がします。今、中1になっています。二人とも何とか育ててくれています。

転職してよかったかどうかと、よく聞かれるのですけれども、会社員のままでいたら、

60で定年だったのが、関学に来たことで68まで定年が延びたので、43で子どもが生まれても、何とかこの子たちが一人前になるところまで働けるかなと思ったら、本当に転職してよかったなと思います。転職してよかったのかな、みたいな迷いが全然なくなったのは、43で子どもができてからという気がします。

最後にちょっと余計な話をしましたけれども、最初にグルーベル先生に読んでいただいたのは、そんなことを考えながら、何の話をしようかなと思ったときに、一番じっくり来るのがこれだったのです。「怠け者よ、蟻のところに行って見よ。その道を見て、知恵を得よ。蟻には首領もなく、指揮官も支配者もないが、夏の間はパンを備え、刈り入れ時に食糧を集める」（旧約聖書・箴言）。自分は結局、蟻のだけれども、そのことに誇りを持ってもいいよと言ってくれているような気がして、このフレーズが大好きになったので、読んでいただきました。

こんなふうに、聖書はパラパラめくっていたら、そのとき考えていることとか、思っていることに寄り添う言葉がふと拾えたりするような本だと思しますので、チャペルに、これからもどんどん出てもらって、そのときそのときに、いろいろな言葉を聞いて、全部が全部じっくりこなくても、何か得るものがときどきあるのではないかなと思うので、皆さんも来年度も頑張ってお出してほしいなと思います。私もまたあと2年間、学部長をやることは決まっていますから、今回、これを話したから、次は何をしようかと今から悩ましいのですけれども、学期の最後には、こんな感じで話をしていきますから、できるだけ出てほしいなと思います。

ちょっと長くなりましたけれども、以上で  
終わります。

ご清聴ありがとうございました。

(社会学部教授・学部長)